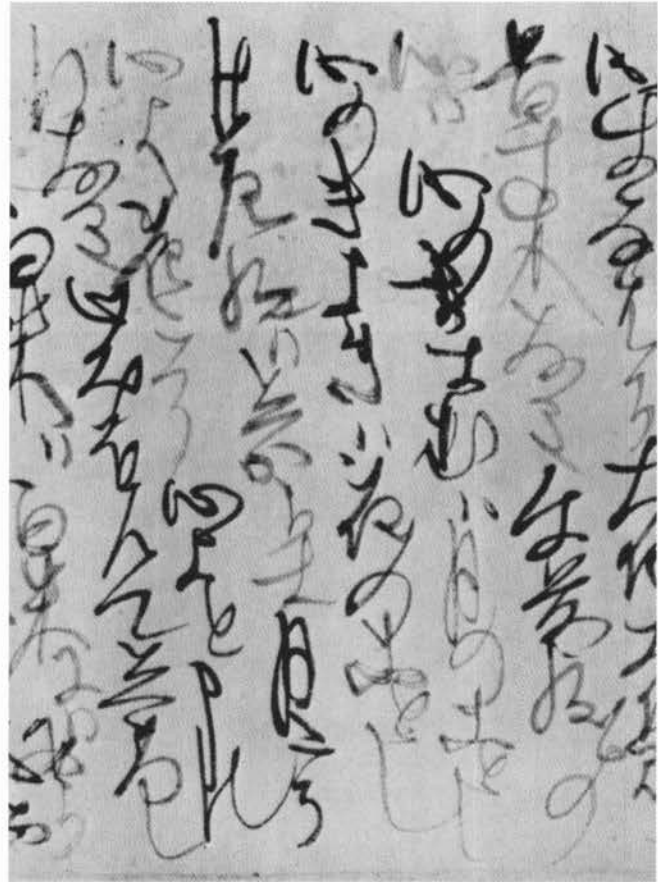




今月の御聖訓



【草木なり。】爾前ノ経々の
心ハ、心のすむ八月のごとし、
心のきよきハ花のごとし。
法華経はしからず、月こそ
心よ、花こそ心よと申す法
門なり。【此をもんでしろし】

【白米一俵御書 全集一五九七頁】

目 次

《第53回法華講総会特集》

今月の御聖訓

| | | |
|----------------------|------------|----|
| 住職指導「妙法蓮華経そこが命の根源」 | 菅野憲道 | 2 |
| 講頭挨拶「心こそ大切なれ」 | 森 秀之 | 3 |
| 所感発表「父が遺した物 三十年」 | 平井勝男 | 4 |
| 講演「科学から見た死、仏教から見る死」 | 蓮興院執事 吉田真道 | 8 |
| カメラ・アイ《法華講総会》 | | 10 |
| 落ち穂拾い | | 18 |
| 恵目だよ | | 19 |
| 行事 訃報 六月・七月・八月の行事 など | | |



「心こそ大切なれ」をテーマに

第五十三回 源立寺法華講総会を開催

五月十一日（日）午後一時から、第五十三回法華講総会が、源立寺本堂において開催されました。

定刻午後一時より、菅野ご住職の導師により、法華講物故者の追善法要が奉修され、その後、司会・進行の井元恵子さん・遠藤裕美さんの開会の辞より総会は始まりました。次いで「諸法実相抄」の行学二道のご聖訓を全員で奉唱し、講頭挨拶に続いて、西良子副講頭の会計報告、松井照雄顧問の監査報告、寺川春美副講頭から活動報告があり、続いて役員認証式が行われ、住職よりそれぞれの役員代表に認証状が渡されました。

所感発表では、豊能地区の平井勝男さんが「父が遺した物三十年」と題して、副講頭を務めた故平井年春氏の知られざる思ひ出話は会場を大いに沸かせました。そして一旦小憩となり、恒例となった松井顧問の体操がありました。

講演では、山口県の蓮興院執事・吉田真道師より「科学から見た死、仏教から見る死」と題して、臨終と信心に関してのご講演をいただきました。その後、菅野ご住職の指導、さらに虫邊慶次さんの閉会の辞をもって、法華講総会は終了しました。

引き続き、第十三回の新菩提寺建立護持会総会へと移り、役員の変更、会計報告、その他の順で議題が審議され、新菩提寺建立のため意見・提案等が出されましたが、それぞれ原案通り承認されました。

指導教師の挨拶の後、全員でお題目を三唱して、法華講総会並びに新菩提寺建立護持会総会とも滞りなく終了しました。



【法華講総会 住職指導】

妙法蓮華經こそが命の根源

住職 菅野 憲道

指導される菅野ご住職

昨年末から源立寺の諸行事において一念三千ということを申し上げております。この一念三千を別の言葉に置き換えれば、本日のテーマ「心こそ大切なれ」ということになると思います。

現代人の生命観、或いは自我観というものは、ほとんど顛倒しているであります。

自我偈に「令顛倒衆生 雖近而不見」と説かれておりますけれども、そのことは、苦しみと楽しみ、或いは憂いと喜び、或いは自分と他ということ、或いは死、あらゆることにおいて逆立ちした価値観を持つているのであります。

「心こそ大切なれ」と言っても、決して我がままな感情、貪欲や慢心の「心」を指すのではないのであります。

すなわちこの妙法蓮華經、このお題目こそが我々の命の根源であるし、このお題目を常に持つていく時、初めて三千世界を我が身、我が世界とする、そういう仏の境地に達することが出来るのだと思っております。成仏に向うか、悪道に墮ちるか、心一つだと説かれております。

どうか、この総会を契機として、「心こそ大切なれ」を合言葉として、より一層この妙法蓮華經の信仰を深められることをお願いしまして、指導いたします。本日は大変おめでとうございます。

【講頭挨拶】

「心こそ大切なれ」

講頭 森 秀之



森 講頭

返事のお手紙の一節に「心こそ大切」という文章表現の一部を拝読させて頂きます。皆様もご存じであります大変有名な一文です。

「ただ心こそ大切なれ、いかに日蓮いのり申すとも不信ならばぬれたる・ほくちに・火をうちかくるが・ごとくなるべし、はげみをなして強盛に信力をいだし給うべし」

（四条金吾殿御返事「法華経兵法事」）

本日は、第五十三回源立寺法華講総会を、皆様のご参詣のもと無事盛大に開催することができました。誠にありがたいことと、共々にお慶び申し上げます。います。

さて、本年度の総会は、正直を旨とする我々の信心の要である「心こそ大切なれ」を、テーマとしました。

大聖人様が四条金吾殿へ認められた御

一般概念としてこの「心こそ大切」という言葉には、物事の本質や価値は外見や形ではなく、内面にあるという意味が込められていると思います。どんな状況においても、心の持ちよう一つで、感じ方や行動、そして結果まで大きく変わってきます。困難な状況でも前向きな心を持ち続けること、他者を思いやる暖かい心を持つこと、目標に向かって努力する

強い心を持つこと、それらこそが人生を豊かにする上で最も大切な事です。

しかし大聖人様のお手紙の「心こそ大切」とは、そのような相対的な心の有り様ではなく、絶対的な心の有り様という表現が良いのか解りませんが、世間一般での四苦八苦、幸福が訪れようが、一喜一憂せずただ南無妙法蓮華経を信じる心こそが大切であり、言い換えれば覚悟を持つ事だと思えます。日々の修行においては、南無妙法蓮華経を信じる絶対信を磨くために、余事余念なく題目を唱え信念受持し一念三千の成道を歩む信仰世界と現実の世事や人事も仏道修行のごとく分け隔てなく努めよと仰せであるのだと思えます。

本日の総会テーマ「心こそ大切なれ」を私自身も肝に銘じ、南無妙法蓮華経の信仰、仏事を優先する気概をもって、この信仰が自らの誇りとして、手次の師匠共々に信心修行、縁ある人へ法燈相続に励むことを大聖人様・御本尊様にお誓い申し上げます、総会のご挨拶とさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございます。

【所感発表】

父が遺した物 三十年

豊能地区 平井 勝男

皆さんこんにちは。私は平井勝男と申します。

実は、父が遺した物ということで、皆様に知っていただくというか、聞いていただきたい話がたくさんございまして、住職にも色々のご協力いただき、沢山の資料がありまして、これを読み上げていたら時間が足りないということで、かいつまんでお話をさせていただきますと思います。



平井勝男さん

ものすごく驚いたことに、この53回のテーマ「心こそ大切なれ」と書かれています。この「心こそ」という言葉なんですけれども、唯一父親と、強烈に印象に残っていることがあります。

昭和五十六年、東京の目黒のお寺に父と二人で伺いました。住職が正信覚醒運動で活動されていて、その住職の矢面に立ったお坊さんです。

父は非常に溫和しい人で、私自身父に叱られたことも怒られたこともない、静な父親でした。

その父親に、「お寺に行くぞ」「どこのお寺や」「目黒のお寺や」「目黒って東京かいな」という話になりまして、父親と二人、わざわざ東京まで行きまして、「おまえはここで待ってる」と、目黒のお寺の入り口で待たされたんです。

入り口で待たすんなら連れて来るなよ

と思っただけですけれども、父親が一人でお寺に入って、ご住職とお話をされていました。

何を話したのかは分かってないんですが、父親が急に、大きな声で「貴様は心が曲がつると」と言うんです。外で待っていた私の所まで聞こえるぐらいですから、かなり大きな声でそのお坊さんに言うたんでしょうね。そういう父親でした。

お寺から出てきて、「勝男、あのご住職な、真っ青やった」と。そりやそうでしょう。突然大阪から来て、真っ青になるでしょう。

なぜ父が住職に向って「心が曲がつると」と言ったかは分かりません。

今回のテーマが「心こそ大切なれ」ですので、最後に言わせていただくつもりでしたが、言い忘れるといけないので、先に言わせていただきました。

私には姉がいるのですが、二十五、六年前、ここで同じように所感を発表させていただいたという姉がおりました。

長い歴史を経て、姉と弟がこのように

所感発表させていただくというのは非常に有り難いなど、皆様に心から感謝致します。

姉がその所感発表で言っていたことがありまして、私もそうだなと思ったんですけども、声を掛けることの大切さというんですかね、お一人お一人に心から声を掛けて源立寺にお誘いする、これは本当に必要なことではないかなと思っております。

僕自身も色々な人に「出ておいで」と声を掛けられて、ここに足を運ぶようになりました。

二年前、ちょうど十一月十三日ですね、住職にお米を持つていこうと思つて来た時に、バツタリ法華講の人にお会いして、「平井さん、何してんねん、お寺においで」って言うていただいたその言葉で、ちよくちよくお邪魔するような形になりました。そして役員までおおせつかつて、身が引きしまる思いです。

心こそ大切と姉が昔言っていた、皆んなに声を掛けて、一人でも多くこの源立寺に来ていただけるようにしていこうよねってというのが、姉の文章にございませ

た。

それはさておいて、私自身の自己紹介をしなければいけないと思うんですけども、もう皆さんご存知のように軽い男やなという思いがあると思うんですが、実は数十年前に父に言われた言葉があるんです。社会に役立つ人間になっていけと言われましたね、「仕事をしながらそんなこと出来るかいな」と思つてたんですけれども、三十五年間ボランティア活動に携わつておりました。

青年会議所の議長とかもやらしてもらいましたし、国境無き医師団でパスポートが真っ黒になるほど海外に行つて色々な活動をやらせていただきました。その話しをさせていただくのが一番僕らしいと思つているんですけれども、その前に、実は、住職にナイショでこっそり選挙に出たんです。豊中で選挙に二万票いたただいたんです。創価学会にデマを流されて、「平井年春はこういうやつや、その息子がこいつや」というようなことになって、一夜にして公明党の人が逆の人に入れてしまつて、二万票しか取れず残念なこと

なんですけれども、まあ先の見えない自分ではありました。

けれども、いつも住職から言っていただけののは、「平井さん、あんたにはお父さんの徳が降り注いどる、その徳が消える前に信心しろよ」というように言われ、その徳が消える前に信心をする気持ちになりました。

今日も三人ほど来たいという者がいたのですが、先日御授戒をうけた鈴木君が来てくれています。

いよいよ本命の父の話なんですけれども、父は、実はオリンピックの選手でした。これも調べてみなければ分かんかったんですけれども、陸上、三段跳びのオリンピック選手で、オリンピックの強化団に入っていました。「全国国民体育大会」今で言う「国体」後藤新平が作ったといわれる「国民体育大会」。この体育大会の趣旨は、強靱な体力を持った兵士を作りたいということが始まったのが由来だそうです。

たまたま運悪く、父は三段跳びで優勝してしまいます。そしてオリンピックの

選手団に入りました。結局オリンピックには出ていないんですけれども。早稲田に進学して陸上の競技をやったんですけども、三段跳びというのはめちゃくちゃ難しく、陸上に本当に必要な運動能力だそうなんです。今も陸上自衛隊に三段跳びの授業があるくらいです。

後藤新平の迷惑通り、強靱な男がおるといふことで即、召集令状が来ました。父はフィリピンに配属になりました。

父の任務というのは、馬に乗って、方位を示してそこに大砲を撃たすという任務だったそうです。もう一つの任務が、兵隊さんが内地に送る手紙の中味を確認する任務もあたりしました。

ある兵隊さんが奥さんに送る手紙を確認した時に、胸を非常に打ち抜かれたと言っております。

敵方はアメリカ軍なんですけれども、アメリカ軍のいない所を目指して大砲を撃たせていたと、相手方にも奥さんがいて、愛する人がいるだろうといふことで、私は一人も人は殺してはいないはずだみたいなところでよく言っていました。

「おとん、そんなんやから日本が負け

んねん」みたいな話をしたのも記憶にございます。その時父はただニコニコしてそれをやり過ぎたんですけれども、当時は非常に劣悪だったそうです。

当時、東アジアはヨーロッパの植民地になっていました。インドネシアはオランダの植民地、フィリピンはアメリカです。インドはイギリスで、ペトナムがフランス。で、植民地化されていたんです。父の行ったフィリピンというのはものすごくアメリカの勢いがあった所です。

父がフィリピンで戦闘しているところに、いよいよ一九四一年、大東亜戦争です。真珠湾攻撃が開始されました。真珠湾攻撃と同時に植民地化されている所に日本群は進出したらしいです。これは父からよく聞きました。

真珠湾攻撃で「トラトラトラ」と言いますよね、でも父が言うには「トライトライトライ」だったそうです。

父は結構、活躍と言うか、いろんな意味で戦争において任務を果たしていたんですけれども、残念なことにマラリアに罹ってしまいます。負傷した兵士は当時の満州に強制送還、戻らされる。残念な

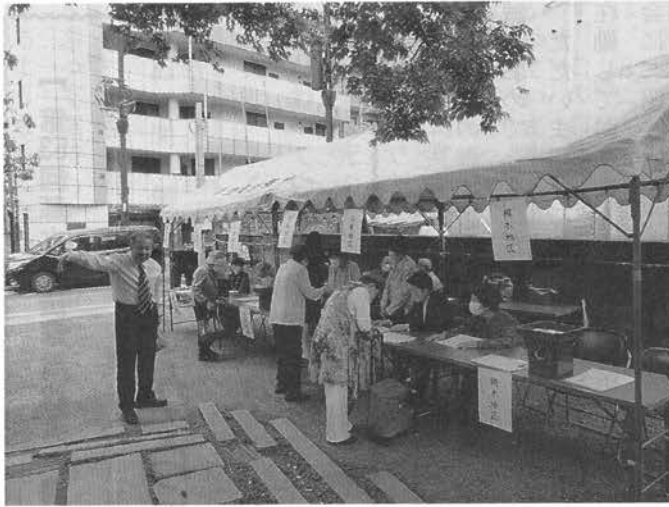
ことに満州で父は左足を失ってしまいました。

一九四五年八月十五日正午、玉音放送で終戦を満州で知らされました。

日本に帰って来たのは舞鶴港。そこからは実は沢山のストリーがあるんですけども、そういう父でした。

これからどうして生きていくんだろうと思案していたそうです。

父の弟は今で言う宮崎放送の副社長でした。母と姉が夏休みに叔父ちゃんのところに行って、すごいお屋敷やったと言ったのを覚えてます。僕はまだ小さかったもので、当時、団地で暮らしてましたので、宮崎で暮らそうみたいなことを言ったのを憶えています。それで兄弟喧嘩をしたのもよく覚えてます。でも父は、ガンとして宮崎に行くことはありませんでした。父は右足一本で私たち三人を支えてくれたのは紛れもなく本当であって、そういう父が源立寺の門を叩くわけです。そこで、昭和五十四年、向島ご住職が三十九歳の若さで亡くなってしまいました。で、父はこれから正信会はどうなっていくんだと悩んだと書かれています。



そうしますと、その年、千葉から颯爽と今のご住職が来られたというふうに書いていました。

住職が来られて「平井さん、信心は数じゃないよ」ということをご住職から説いていただいて、父は二十年間ずっとご住職に色々な教えを頂戴して、この源立寺に、右足一本で通って、右足一本で正座して、ご住職の背中を見ながら一所懸命信心に励んだ父でございました。信

心が苦しいって言っていました。「親父、信心の何が苦しいねん」と聞いたたら、

「正座が苦しいんや」と言うてました。それは苦しかったでしょう。でも父はそれをやりきって、すべての行事に参加し、信心を貫き通しました。父は七十二歳の生涯を終えました。

七十二歳の生涯を終え、ちょうどこの場所で、たくさんのご僧侶に来ていただいて、見送っていただきました。私の知り合いもそのお葬式に参列したんですけど、でも、こんな立派なお葬式は始めてやって言っていました。もう三十五年経ってこのように言うのはおかしいんですけど、でも、本当にありがとうございます。

私自身はここで、少しでも父に近づいて行きたいなあ、ご住職に言っていたように、父の徳が降り注いでいる私を、少しでも信心によってお礼を言っていきたいなというふうに思います。

それで、四十年前父が遺した言葉があるんです。皆さんに是非聞いていただきたい、何か心に訴えるものがあればいいなというふうに思います。

「真実の仏法に巡り会い、まがりなりにも法華經を受持し、自由で平穩に、満ち満ちて、真に生きることを実感できる毎日であります。若い人達に伝えたいことは、今この生を大事にしてもらいたいということです。真実とはどこか他方にあるわけでもなく、今あなた方が従事しておられる法華經にございます。どうか、若い情熱によって、この法華經の信心、心を探求されることをお願いいたします。私の青春の記録を終らせていただきます。」

ということ、四十年前に父が書いた日記から皆さんに聞いていただきました。まさに信心とは「信じる心」ということで、今回のテーマにもピッタリなところではないかなというふうに思います。これから、とにかく皆さんに信じていただける様な信心を貫き通して行きたいという覚悟がございますので、どうか、皆様、ご指導よろしくお願いいたしました。私の所感ということにさせていただきます。

今日はどうも皆さんありがとうございます。

【第53回源立寺法華講総会 講演】

科学から見た死 仏教から見る死

蓮興院 執事 吉田 真道

皆さん、こんにちは。本日は源立寺様の第五十三回法華講総会が諸天の御加護に恵まれた中、盛大に開催されましたこと、誠にありがとうございます。

ただいま紹介にあずかりました、山口県山口市・蓮興院にて在勤しております吉田真道と申します。歴史ある源立寺様の総会にお招きいただき恐縮するとともに有難く思っております。

先程、監査役の松井様から、「五十三年前の第一回総会に出席した人は、今ここに誰一人いない」とのお話がありました。これを逆に考えれば、この半世紀の間に、今ここにおられる、これだけの人数の皆様が妙法の信仰に仏縁を結ばれたということであり、大変有難く思っているところです。その半世紀の間に私も生まれ、縁あって出家し、今こうして席の一つを埋めることができているということに有難い仏縁を感じているところです。

しばらくお時間を頂戴して講演を勤めさせていただきます。足を楽にしてお聴き下さい。

さて、荒木英一殿、荒木清勇居士というお名前を皆様もよくご存知であると思います。明治期に日蓮正宗法華講の初代総講師を務めた方で、ここ源立寺の再建にも尽力された強信のご信徒です。

源立寺様の御宝前に安置されている『法華経』十巻と経箱は荒木清勇居士の寄進によるものと、ご住職が書かれた『忘れられた総講師』という書物で知りました。

そこにまた、こんなことも書かれていました。荒木清勇居士は山口県萩市の出身で、吉田松陰先生（山口県では「先生」をつける習わし）に師事した松下村塾の門下生だということです。武士であった荒木家の養子となつて荒木姓になったようですが、当院信徒にも荒木さんという姓の方がおられまして、もしかしたら遠い親戚かもしれません。

また、総会前に森講師と少し挨拶を交わしましたが、昔、仕事で山口県におられたとうかがいました。そうした不思議な仏縁を感じながら、本日参詣させていただいた次第です。

「死の教育」の必要性を感じる

それでは、本日は「科学から見た死、仏教から見る死」と題しまして、死について極々一端ではございますが考えてみたいと思います。と言いますのも、私が常々考えていることは、もつと「死の教育」をしなければいけないということです。これはお寺・僧侶の役目ですが、それが疎かになっているために、命を軽視したような事件や事故が昨今頻発しているのではないかと思います。また、葬儀の形態も大きく変わりつつあり、これについても色々疑問を持たざるを得ないことが多々あります。



あらためて死の教育をしなければと思つていて、そこです。そこで、死ということを、科学的に、また仏教の基本的な考えから見た上で、命の有

難さや信仰の大切さについてお話ししたいと思います。

3種類あると言われる「命」

まず最初に、来月の6月に一周忌を迎える前執事・大谷吾道師へ哀悼の意を表します。興風談所の所員であった師は同じ中国教区であり、また奥様が山口県の萩の出身ということで、昔からのお付き合いであり、奥様のご親族とは今も付き合いがございます。ですから、親戚の叔父のような存在で可愛がっていただきました。訃報を聞いて葬儀に参列しましたが、悲しいのは勿論のこと、心に穴が空いたように感じられました。

この「死」、つまり命が失われるということですが、この命には3種類あると申します。

1つ目は「肉体としての命」です。これは私たちが産まれてから死ぬまで、今こうして生きている生身の肉体のことです。死ねば、塵となり水となって自然界へ還っていく無常の存在です。

2つ目は「血としての命」です。これは今で言えば「遺伝子としての命」と言い換えることができます。私たちは父と母から半分ずつ血、つまり遺伝子を頂戴して命が成り立っています。四十億年前、この地球上に生命が誕生してから、変化と進化を繰り返しながら連綿と続いてきた遺伝子の全てが、私たちの遺伝子に書き込まれています。この血としての命を、今こうして享受しているのです。そしてまた、この血としての命は、皆

《カメラ・アイ》

去華講総会



総会の前に法華講物故者の追善供養が行われました



役員認証式で代表して辞令を受ける
森講頭(左)、福田婦人部長(下)



司会進行の遠藤裕美さん(左)
井元恵子さん(右)

第五十三回

源立寺法華講総会式次第

テーマ 心こそ大切なれ

司会進行 井元恵子
遠藤裕美

一、開会の辞

二、ご聖訓 『諸法実相抄』奉唱

執事 大橋一法師

三、講頭挨拶

講頭 森秀之

四、会計報告

副講頭 西良子

五、監査報告

監査役 松井照雄

六、活動報告

副講頭 寺川春美

七、役員認証式

八、所感発表

『父が遺した物 三十年』

豊能地区 平井勝男

九、御講演

『科学から見た死、仏教から見る死』

山口県 蓮興院執事 吉田真道師

一〇、御指導

住職 菅野憲道師

一一、閉会の辞

幹事 虫遺 慶次

第十三回 新菩提寺建立護持会総会

一、経過並びに決算報告

委員長 森秀之

二、指導教師挨拶

住職 菅野憲道師

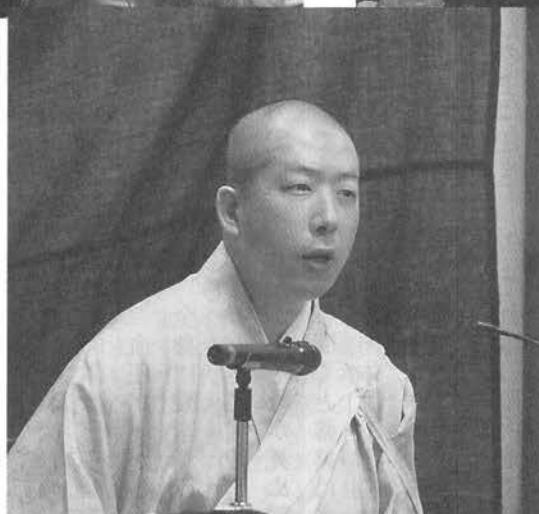
三、題目三唱



第53回 源立寺



所感発表をされる平井勝男さん



山口県山口市からお招きし、講演いただいた
蓮興院執事 吉田真道師



さんのお子さんやお孫さん、兄弟や親族に受け継がれながら、また次の時代につながっていきます。

ですから、今皆さんが生きているということは、これまでの全ての生命が受け継いできた血としての命の集合体であり、そしてまた次の世代へと引き継がれていく、連続する流れとしての命と言えます。

そして最後の3つ目ですが、それは「記憶としての命」です。産まれてから死ぬまで様々な人と出会いますが、それぞれの人の中に皆さんの記憶が刻まれます。言うなれば、それらの記憶の集合体が皆さんの命だと言えます。

その記憶は、皆さんが亡くなった後も残り続けていきます。その記憶を持った人が生きている限り、そしてまた、その記憶を語り伝えていくなら、その記憶が残る限りは「記憶としての命」が失われることはありません。皆さんの名前が語り継がれる限りは、皆さんは死ぬことはなく、常住の命を得たとと言えるのです。

これは何も有名人になれということではありません。皆さんが、今こうして肉体として、また血として与えられた命でもって、生きている間に何をしたらか、何を語ったか、何を感じさせ考えさせたか、そこに皆さんの名前が結びついて、人々の記憶に刻まれていくのです。それが記憶としての命ということなのです。

これは信仰の上でも言えることです。私たちが信仰する『法華経』において、仏の命は無量であり、この世に常住して常に法を説かれることが説かれています。肉体としての命はなくても、血としての命はなくても、記憶、言うなれば心の中に住ま

う仏は、皆さんが生きている限り、皆さんの心の中でしっかりと命を宿しているのです。私たちが仏を思い、仏のお言葉たる教えを学ぶ度に、仏は私たちの心の中で常に法を説いて下さるということなのです。

命とは、こうして見方を変えることによつて、生き死にを超越することができるわけです。

医学的に見る「死」を迎えた時の状況

とは言いましても、こうして生きている以上、私たちに自分の命以上に大切なものはありません。言い換えれば、自分の命が失われる、つまり肉体としての死ほど怖いものはありませんし、人生における様々なストレスの中で最大のストレスが死です。

さて、それでは自分自身の死はどのように進むのでしょうか。臨終の肉体はどうなるかと言いますと、心臓が弱まって心拍が落ち、血圧が下がる「虚血」と呼ばれる状態になります。つまり、全身に酸素が行き渡らなくなります。1分でも息を止めれば、胸は苦しくなり、頭がガンガンし始め、少しも我慢できませんが、それが死ぬ瞬間まで続くのです。

こう聞くと臨終はさぞ苦しく怖いと思ってしまうのですが、私たちの肉体は不思議なもので、こうしたストレスに弱い脳は、このストレスから脳自身を守るために麻薬物質を放出するので

す。これは「脳内麻薬」と呼ばれまして、世間でも問題となつて

いる麻薬とよく似た、もしくは同じ成分の化学物質が私たちの体に含まれているのです。「私たちの体の中に元々麻薬があるだつて？ そんなバカな」と思われるかもしれませんが、そもそも、この世には様々な毒と薬がありますが、なぜ毒や薬が効くのかというと、その毒とよく似た成分、もしくは同じ成分が、私たちの体に元々あるからなのです。逆に、元々ないものは毒にも薬にもなりません。病気とは体内のバランスが崩れて薬の成分が出なくなつた状態であり、病気の時に薬を服するのは、それを補うためなのです。ですから、麻薬が効くということは、それと同様の物質が元々体内に存在しているということなのです。

実際に何種類かの脳内麻薬が知られています。死ぬ瞬間には、β（ベータ）エンドルフィンという脳内麻薬が放出されます。このお蔭で、臨終の痛みや苦しみが和らげられることが分かっています。よく、臨死体験をした人が「三途の川が見えて、お花畑があつて、とても気持ちが良かった」と言いますが、そうやって幻覚を見させて気持ちよくさせることを脳内麻薬がやっています。麻薬と聞くと怖いですが、毒と薬は紙一重で、脳内麻薬は死の苦しみを和らげる一種の妙薬として私たちの体にそなわっているのです。

ただし、あくまで紙一重であつて、世間の麻薬がそうであるように、脳内麻薬も猛毒にもなり得ます。

死ぬ瞬間、例えば財産などに執着して「まだ死にたくない！」と強く思ったり、家族が「まだ死なないで！」と体をゆさぶつて気持ちを引き留めたり、そういうことをして生に執着するような心になると、せっかく薬として作用しようとしてい

た脳内麻薬が猛毒に変わつてしまい、悪い幻覚を見させたり、逆に体中にストレスをかけたりにして、仏教で説く、いわゆる地獄の相をして苦しみながら死んでいく原因となつてしまふのです。

つまり、臨終の心の有り様・持ち様によつて、脳内麻薬は妙薬にも猛毒にもなるのです。

仏教で説く臨終を迎えるための用心

ですから、仏教では臨終の心の持ちようを説き、大切にします。日寛上人は『臨終用心抄』という、臨終に関する話を集めた書き物の中で、「底心」ということについて紹介されています。

江戸時代の日蓮宗僧侶・日重の『空過致悔集』にこうあります。

一、唯今と見る時、本尊を病人の目の前に向へ、耳のそばへより「臨終唯今也、祖師御迎ひに來り給ふ可し、南無妙法蓮華經と唱へ給へ」とて、病人の息に合せて速からず遅からず唱題すべし。己に絶へ切つても一時ばかり耳へ唱へ入る可し。死にても底心あり。或は魂去りやらず。死骸に唱題の声聞かすれば愚趣に生るる事無し。

——一、ただ今（臨終）の時、御本尊を病人の目の前にお掛けし、耳のそばで『臨終はただ今です。大聖人がお迎えに來られますよ。南無妙法蓮華經と唱えましょう』と言つて、病人の息に合わせて、速からず、遅からず、唱題する

べきである。すでに息が絶えていても、2時間ばかりは耳元へお題目を唱えて聞かせなさい。死しても、その奥底にはまだ心が残っていたり、あるいは、魂が去りきったわけではないので、死骸に唱題の声を聞かせば、悪趣（地獄・餓鬼・畜生の三悪道）に生まれることはないのである。

一、死後の五時も六時も動かす可からず、此れ古人の深き誠め也。

——一、死後の遺体は、10時間から12時間は動かしてはならない。これは古来の人の深き誠めである。

つまり、亡くなりゆく人のそばでは静かにお題目を唱え、死んだ後もまだ魂が残っているので唱題の声を聞かせ、ご遺体も半日ほどは動かしてはいけない、と古来仏教では説いているのです。

死は、以前までは「呼吸の停止、心臓の停止、瞳孔の拡大」で判定されていましたが、今は脳の死を判定基準に加えるなど死の定義が難しくなっていますが、およそ死と判定された後でも、肉体は細胞レベルで生きていることが分かっています。

| | |
|---------|---------|
| 大脳皮質 | 5分 |
| 心筋 | 10〜20分 |
| 延髄 | 20分以上 |
| 骨格筋 | 2〜4時間・ |
| 胃の消化能力 | 数時間 |
| 胃・腸壁細胞 | 10時間 |
| 軟骨細胞 | 10〜24時間 |
| 精子・表皮細胞 | 数時間〜数日 |

骨細胞————20〜70時間

つまり、仏教で説くところの底心や、そこから導かれる臨終の心構えは、まさに科学的にも理にかなっていることなのです。

医療の世界では臓器移植が行われていますが、これによって救われる命もありますので表立って反対はしませんが、底心や臨終ということを考えた時に、私個人としては臓器移植をする意思は持っていませんし、逆に私が移植が必要な病態になったとしても移植を受けようという考えは持っておりません。両親と宇宙法界から与えられた肉体と命を全うするだけだと思っています。

「死」を忘れた所に「命」の尊さは見出せない

そもそも、肉体は日々、瞬間瞬間に生き死にを繰り返しています。皮膚の細胞は毎日、内臓も数日、骨も2年半くらいで全て入れ替わっており、生まれてから死ぬまで変わらないのは脳細胞と心臓の細胞くらいです。ですから、3年も経つと身体中の細胞がほぼ入れ替わっているのです。

そうして身体が変われば心も変わります。「石の上にも三年」と言いますが、3年もすれば身体も心も慣れるということ、科学的にもそう言えるのです。良くも悪くも、3年もすれば、3年前の自分から生まれ変わっているのです。

仏教における「六道輪廻」も同様に考えることができます。輪廻とは、決して死んだ後の話ではありません。今、生きている時の話なのです。心と身体が六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人

・天)の世界を常に行ったり来たりしているのです。

また、「諸行無常」もそうです。諸行、つまり私たちの諸々の行為と、そこから起こる心が一定しておらず、常に変化し続け、周りの影響を受けて揺れ動いていることを諸行無常と言います。

これが「縁起」という仏教の基本的な考え方です。

ですから、生と死はあざなえる縄のように、常に表裏一体で存在しているのであり、つまり死を忘れたところに本来の生の価値や、命の大切さは見いだせないのです。

ですから、死をはじめとする四苦八苦から生の価値を説く仏教において、その伝道者たる私たち僧侶は、常日頃から死を意識することで命や人生を大切にできるような、法号を名乗り、死装束を身につけています。僧侶の道号は法号(≡戒名)です。つまり、仏の弟子としての名前です。私の道号は「真道房日涌」と言いますが、私が死んだ時はそのまま「真道房日涌」と塔婆に書かれます。本来は、ご信徒であっても生前に法号を与えていただくのが筋です。

また、僧侶は衣の下に白衣を着用します。白は「清浄な色」「汚れを祓う色」を意味しますが、これはつまり死装束を意味しています。江戸末期の京都で活躍した新撰組は浅葱色の隊服を着用しましたが、これは切腹のときに着る死装束です。つまり、いつでも死ねる覚悟を示していたのです。

白衣を着るケースが世間でもあります。それが結婚式の時に花嫁が着る白無垢です。日本にはハレとケという考え方があり

ます。ハレは非日常、ケは日常です。死も結婚も非日常であることから、花嫁は白無垢を着用します。そして昔は、年若い夫が亡くなる時には、昔着た白無垢を仕立て直して喪服として葬儀に着用し、さらに自分自身が亡くなる時には死装束としていました。日達上人のご葬儀では、奥様は白装束だったと聞いております。日本は古来、喪服は白色でした。しかし、明治期以降、洋装を着用するようになって、ヨーロッパの風習にあわせて喪服が黒装束となったのです。

こうして僧侶は、いつでも死ねる覚悟を持つためにも白衣をまとっているのです。ただし、生を軽視しているわけではありません。僧侶は勿論、誰よりも長生きして、一人でも多くの信徒に引導を渡すことも役目です。一日でも長生きすることが僧侶の責務でもあります。命を大切にするために死装束を着ているのです。

このように、お寺では「死」とか「苦しみ」とか、そういうことばかり説いて辛気くさいと世間では思われるでしょうが、「死」や「苦」にこそ本当の意味で幸せになるヒントが隠されているから、あえて辛気くさい話をするのです。

大聖人様のお言葉の中に、

「先づ臨終の事を習ひて後に他事を習ふべし」

(『妙法尼御前御返事』全集1404頁)

との有名な御文があります。老若男女いつ死が訪れるか分かりません。いつ死んでもよしとする生き方の上に立たなければ、人生の本当の設計はできません。「臨終のこと」を学ぶという

ことは、「いつ死んでもよし」とする充実した生き方を学ぶことでもあらうと思えます。

「臨終のことを習う」と言っても、「死をもつて人間としての命の終わりである」と凡夫の浅はかな考えで見るとはならず、今世における人界の終わりであると見ていくのです。つまり、死は今生の集結です。生の喜びも、今日という日を大切にしようという発心も、人を愛する心も、向上しようという願いも、正しく生きようとする決心も、それらは全て死が隣に控えて、人に警鐘を鳴らし続けるからこそ起こってくるのです。

私たちは誰もが必ず死を迎えます。誰でも人生最大のストレスである死を怖れますが、それは逆に真剣に生きようと思うが故に怖れることであり、人としての本能でもあるのです。

まさに大聖人様の教えは、この世をいかに生きていくかに焦点が当てられているわけです。臨終の一念に地獄・餓鬼・畜生・修羅の命で終わっては大问题であり残念極まりないことです。脳内麻薬は薬ではなく毒となつて断末魔の苦しみを与えることでしよう。そうならないためにも、一心に南無妙法蓮華經の信心を純粹に持ち続け、生きている内になるべく悪業という毒を捨て、さらにはその毒を変毒為薬の功力によつて成仏という妙薬に変えていきたいものです。

仏教とは、自分で自分を救う教えです。なぜなら、死んだ後にあの世に持つて行けるのは自分が積んだ業だけだからです。善い業も、悪い業も、全部持つて行くのです。この世に残される肉体も、肉身も、財産も、ありとあらゆる形あるものは置いていかねばなりません。そうして後に残るのは名前だけです。

つまり、私たちの生き方、記憶だけが残されます。

そうであるならば、なるべく悪業を減らして善業を積むべく、よい生き方をして周りにより記憶を残すべく、生涯精進していかねばなりません。その生き方を仏教では説いているのです。

心に残る先輩僧侶の臨終の姿

正信会の中に、本山大石寺と宗門から離れて不安に思っている人が一定数おられます。ご信徒にも、僧侶の中にもいます。大きな寺院や、大勢が所属する宗教団体に行つて所属する方が安心すると言う人もいるかもしれませんが。しかしそれは、周りの人のうねりに流されているだけで、結局は何も考えなくて楽だから、それを安心感だと勘違いしてしまうのです。

宗門では「戒壇の大御本尊を直拝しなければ成仏できない」と言いますが、お題目も、御本尊も、自身の心中にある仏界を引き出すきっかけにすぎません。同じお題目を唱えても、同じ御本尊を拝んでも、結果が同じになるとは限りません。どういう気持ちで信仰するかによつて、結果は全く違つて来ます。

そもそも信仰とは、場所とか、団体とか、物体に寄るものではありません。勿論、それらも大事ではありますが、あくまで手段であり、仏の教えを実践して、自分自身が成仏することを目指すことが本当の目的です。そして、死の間際に自分自身の力でお題目が唱えられるかどうか、そのための日々の信仰でもございます。

ですから、宗門を離れていても、今でも堂々と信仰できるし、

堂々と成仏することは可能です。自信を持っていただきたいです。正信会は小さな団体かもしれませんが、宗門から一時的にでも離れたからこそ、どこにも縛られることなく、自由に大聖人様の仏の言葉を学び、自由に実践することができます。死ぬ時は一人です。大きなお寺も、大勢の同志も、臨終には何も関係ありません。自分を救えるのは自分の生き方だけであり、臨終の際に大聖人様にお迎えに来ていただけるかどうかは、自分自身が生前に積んだ徳によるのです。

あるお二人の先輩僧侶から聞いたお話を紹介します。

ある先輩僧侶が心臓病で倒れた時の話ですが、病院に運ばれた時点で意識を失ったが、頭の中のどこかの意識だけはハッキリと残っていて、その意識の中で法華経とお題目をずっと唱え続けたお陰で救われた、という話を教えていただきました。

また、もう亡くなられたご老僧から聞いたお話ですが、やはり心臓病で倒れられ、意識を失って病院に運ばれたのですが、ふすま1枚以上あるような大きなお曼茶羅が目の前に現れて、感動してひたすら手を合わせ、お題目を唱えたら、そのお曼茶羅がすっと救って下さった、というお話も聞きました。

このご老僧は常々、法要の法話の度に、参詣されたご信徒に対して、「私の臨終の顔を見なさい。それが私からの最後のお説法です」と語っておられました。そのお言葉の通り、最後のお説法として見事な臨終の相を示して霊山へと旅立たれました。

これらの記憶とお名前は私の心に刻み込まれていますし、死ぬまで忘れることはありません。私もそうありたいと、その記

憶としての命を受け継いでいくつもりです。そして、臨終にあっても、薄れ行く意識の中で、もしかしたら無意識にでも、手を合わせてお題目が唱えられたら有難いことですし、そのために日頃から精進していかねばと思っ

明日人生が終ると思っ

永遠に生きると思っ

最後に、世間の言葉を紹介して終わります。

二十一年歳の特攻隊兵士が

残された後輩兵士に言つた最期の質問、

*

*

*

なあ、お前たちは知ってるか？

牛や馬は「一頭」、鳥は「一羽」、魚は「一尾」と、
こう数える。

なぜか？

実は動物の数え方はな、

「死んだ後に何が残るか？」で決まるんだ。

じゃあ、ここで一つ聞きたい。俺たち人間はどうだ？

「一名」。そう、名前だ。

俺たち人間は死んでも「名前」は残るんだ。

お前たちは、自分の大事な大事な「名」に恥じない

「生き方」ができていくか？

一回きりの人生、後悔せぬよう意識すべきことは、

「能力」ではなく「生き方」だ。

「知識」ではなく「行動」だ。

読むべきものは、「空想」でも「本」でもない。「自分」の心だ。

明日人生が終わると思つて生きなさい。
永遠に生きると思つて学びなさい。

それじゃあ、元気に征(い)きます。

*

*

*

本日の総会のテーマは「心こそ大切なれ」ですが、心が人生の行く先を定め、臨終の姿を形作るのです。私たちはこの心を鍛えるために、この心を大切に育んで心に仏を宿すために、この世に命を頂戴したのかもしれない。

皆様が安詳なる臨終を迎えられることを、そのために日々お題目を唱え、世知辛い世間の中で精進していかれることを念願し、本日の講演といたします。

ご清聴、誠に有難うございました。

(終)

落ち穂拾い

*日有上人と一休さん

さまざまな文献を捜していると、時に思いがけない文節に出合う。これは「新発見か？」と期待をもつても、結果はぬか喜びに終わることが多い。次の説話なども期待外れの見本みたいなもの。

「(一休宗純が)御雲水の頃、駿州富士郡大石寺に知音の僧おはすとて尋ね給ふに、互ひになつかしう思召し、しばらく足を留め給へとて、少しの滞留ありしより、近村の凡俗を集め、寺僧の

法談などをし給ふを、助講などあり・
・(この後、殺生を好む鉄砲打ちの百姓喜兵衛の改心談が続くが省略)

(一休諸国物語図会 巻四より)

一休宗純といえは「一休さん」の愛称で誰にも名の知られた禅僧で、室町期に活躍した異色の禅僧だが、一休さんが大石寺の住僧と知りあい、雲水時代に大石寺にも来ていたとなれば大いに話題性がある。

一方の日有上人は諸国を行脚し、天台、浄土の学僧と各所で対論している。これは開書類にも記述されているし、日

有上人の知人の禅僧が大石寺を尋ねてきて暫く逗留し、竹細工の材料を所望したことは化儀抄にも出てくる。そこで、まづ有師と一休の生存期間を調べると次のようになる。

一休 一四八一(文明十三年)寂八七才

有師 一四八二(文明十四年)寂八一才

しかし、室町期に鉄砲打ちの獵師がいるはずはない。法談の助講というの解せない話だ。一休禅師の地方行脚は後世の創作というのが通り相場で、二人に面識があつた可能性を残しつつ、この話は一休さんのお伽話となった。



一月一日零時、参詣された方々と元朝勤行会を奉修

恵日だより

元朝勤行会・正月勤行会

一月一日(水)～三日(金)

令和七年一月一日午前零時、多くの方

々が参詣され、元朝勤行会が奉修されました。

参詣者の本年一年の信行の倍増、家内安全、諸願成就が祈念された後、恒例のお屠蘇のお流れの儀も行われ、参詣者一同、新たな年を寿ぐことができました。

また、例年通り、一日～三日の午前十時と午後二時には正月勤行会が行われ、新年を祝い心を新たにしました。

初お講・合同役員会

一月十二日(日)午後一時

一月十二日、午後一時より初お講が奉修されました。

ご住職より、混迷する現代の世相について、「いろいろな災害に見舞われたり、あるいは治安の悪さなど、だんだん世の中が暗くなってくるのは、法華経の譬喩品に『諸苦所因 貪欲為本』と説かれてるように、人生のあらゆる苦しみの原因は全て貪欲の心から起こってくる。その貪欲は自己中心的な考えが本になっている。人間が賢くなってきたように思え



を説かれたお経によって、そういう堕落を防ぐことができる」という旨のお話がありました。

お講終了後は、お正月に御宝前にお供えされた鏡餅を、婦人部の方々によって「ぜんざい」にして参詣者に振る舞われ、歓談の時間を過ごしました。

小憩の後、幹事・地区役員による合同役員会が開催され、本年前半の行事の実施や、新菩提寺の建立についても、今後

でも、実際にには貪欲の心が働いて、うっかりするとんでもない方向へ行きかねない。法華経という我々の心の中の有り様、命の本質

もより相応しい所を探していく旨の話があり、種々検討がなされました。

役員 研修 会

一月十九日(日) 午前十時

一月十九日(日)、役員研修会が、役員二十数名が参加し開催されました。

午前のご住職の講義では、正信覚醒運動について自身の体験を振り返られ、今後の新菩提寺建立の必要性についてのお話があり、

菩提寺建立について質疑応答が活発になされました。

昼食後、

三月開催の地区総会のテーマ等について、討議され、終了後、題目



三唱をもって、研修会は終了しました。

節 分 会

二月二日(日) 午前九時

今年の立春は二月三日。節分会を講中勤行会に合わせて二日に行う旨を、地区役員を通して連絡をしていただきました。

今年には早朝の節分会となり、二座のお勤めの後、住職が「福は内、福は内」と四方に豆撒きをされ、続いて年女となる、寺川春美さん、菅野千賀子さんがそれぞれ豆撒



きを行いました。

読経唱題の後ご住職より、冬が極まったところに春の始まりがあつて、いつまでも厳しい冬が続くのではなく、大聖人も「大悪をすれば大善きたる」と仰せで、悪が極まれば必ず善に転ずるのであつて、苦しいことが続いて、自分の命を法華経に任せて精進していつていただきたいとの挨拶がありました。

興 師 会

二月七日(金) 午後一時

今年も、多くの講員さんの参詣があり、興師会を奉修することができました。

ご宝前に「セリ」がお供えされ、献膳、読経、唱題と、如法にご報恩申し上げ、法話では「日興上人は『富士の立義、聊かも先師の御弘通に違せざる事』と宣言されている通り、他の門流とは異なる本尊観、宗祖観、修行観を立てられたこと、更に『依法不依人(法に依って人に依らざれ)』ということについて詳しくお話を聞きすることができました。

【訃報】

| | |
|---|---------|
| 〔槻木地区〕豊中市 芳寿院妙愛信女 俗名鈴木アイ之霊 行年九十八歳 | 一月十日寂 |
| 〔兵庫地区〕神戸市 久住院妙邦信女 俗名増井くに子之霊 行年八十九歳 | 二月二十三日寂 |
| 〔大阪地区〕大阪市 静照院妙峰信女 俗名南静子之霊 行年九十八歳 | 四月十日寂 |
| 〔槻木地区〕池田市 慈行院寿芳信士 俗名三好壽芳之霊 行年九十一歳 | 四月十二日寂 |
| 〔北摂地区〕茨木市 恒徳院法道信士 俗名生駒恒之霊 行年八十二歳 | 四月二十日寂 |

この度、右の法華講の方々がお亡くなりになりました。
謹んでご冥福をお祈りします。

法華講総会に先立ち
各地区総会を開催

三月十六日午後二時の槻木地区総会を皮切りに、各地区の総会がそれぞれ行われました。

参加者それぞれが、近況報告や日頃の思い、疑問に思っていることなどを話すことができ、参加者が少ないからその地区総会となり、有意義な時間を持つこ

とができました。

講師の方々がどういふ思いでお寺に参詣されているか、お互いに声を掛けあうことの大切さを知ることができました。



3月16日午後2時 槻木地区参加者



3月22日午後2時 大阪地区参加者



3月22日午前10時半 北摂地区参加者



3月23日午後2時 豊能地区参加者



3月23日午前10時半 兵庫地区参加者



六月の行事



- 一日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
午後二時 お経日
- 八日(日) 午後一時 お講・役員会
- 十三日(金) 午後一時 お講



七月の行事



- 一日(火) 午後二時 お経日
- 六日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 十三日(日) 午後一時 お講・役員会

源立寺法華講の方々には、「現代語訳 妙法蓮華経」、「現代語訳 観心本尊抄」(大黒喜道編)を、贈呈しております。まだ残部がありますので、ご希望の方はお申し出ください(各家庭に一部)。



八月の行事



- 一日(金) 午後二時 お経日
- 三日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 八日(金) 午後一時(金) お盆棚経
- 十三日(水) 午後一時 お講・役員会
- 十五日(金) 午後一時 孟蘭盆会

※お盆の棚経は、希望者のお宅にのみ伺いますので、希望される方は受付にお申し出ください。

恵日

令和七年六月号 通巻三五六号
令和七年六月一日発行

編集兼 菅野 憲道
発行人 菅野 憲道
発行 恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇〇 源立寺内

TEL (077) 751-3335

E-Mail kanno@ombal.zaq.ne.jp
購読料(含送料)年間二〇〇〇円

〒振替 加入者名 恵日編集室会計
口座番号 0138002112649